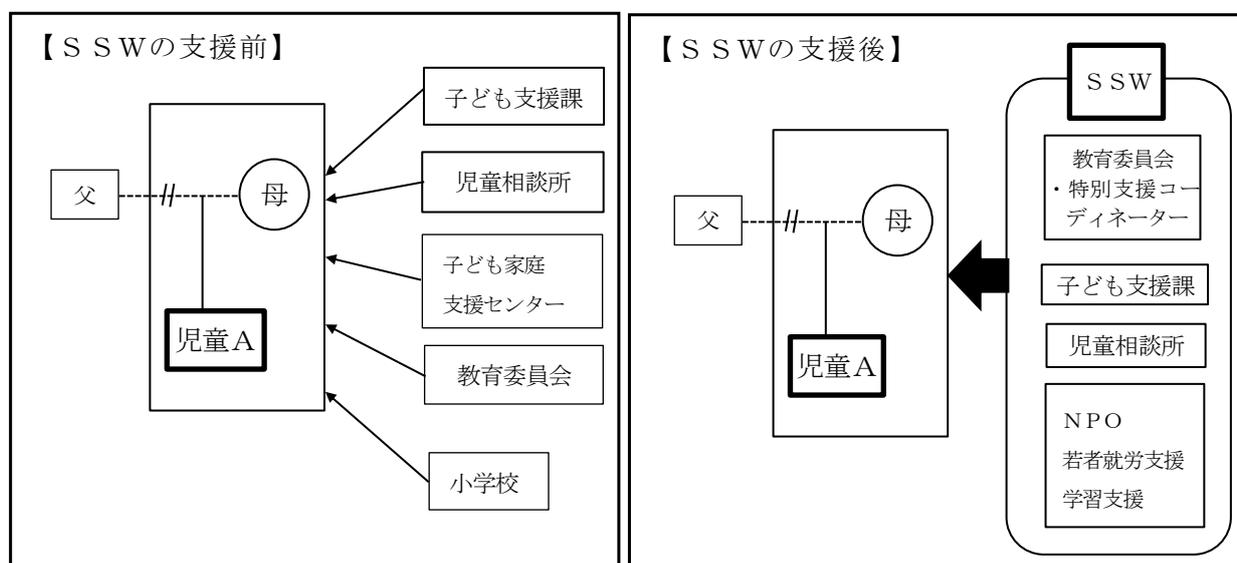


生活困窮世帯の不登校児童が多様な学びの環境を得て前へ進んだケース



1 気になる状況

- 児童Aは、特別支援学級に在籍する第4学年であり、第1学年時に友達に容姿のことをからかわれたことがきっかけで徐々に登校できなくなり、第2学年の夏休み明けから不登校となった。今年度は1日も登校していない。
- 児童Aは、ひらがなや数字の読み書きが苦手であり、これまで学校以外で勉強できる環境はなかった。
- 児童Aは、母親との2人暮らしであり、強い母子密着により、自分でできるはずのことも母親に頼り、本人の経験や自信に結び付かない状況であった。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 幼少期に両親が離婚した。母親とその両親の関係が良好ではなかったことから、児童Aが4歳頃に母子2人で両親とは別の市町村に移住し、生活保護を受け生活を立て直すこととなった。
- 当初、母親は、生活保護を受けながら就労していたが、児童Aが不登校になってからは、家に置いて外へ出ることに不安を感じ、現在就労していない。
- 母親は、児童Aについて、就学前に子ども発達支援センターに相談したが、就学に係る助言を受けてはいない。
- 小学校入学前の教育支援委員会において、児童相談所の検査結果により、生活体験の不足及びADHDの傾向が見られたことから、母親の希望で特別支援学級への在籍が決まった。なお、医療機関での診断は受けていない。
- 伯母と児童Aと同学年の従兄弟が近隣に住んでおり交流はあるが、それ以外の地域住民等との関係は希薄で、母子のみで過ごすことが多い。
- 母親は、児童Aの良いところを認めたり、気持ちを受け止め、十分に甘えさせたりしているが、勉強を教えたり、学級担任が届けたプリント等に一緒に取り組んだりすることはない。
- 母親は、一人で子育てをする中で児童Aの発達の段階に合わせた接し方が分からず、児童Aが自分でできることをやらせずに、母親が行ってしまう場面が多く見られる。
- 母親は、就労を希望しているが、児童Aが不登校の状況では無理だと考えている。
- 児童Aは、手先が器用であり、針金で人形を制作する等、物づくりが得意である。また、読み書きに比べ、会話やコミュニケーションにはそれほど問題を感じない。

【 小学校⑩ 】

- 児童Aは、勉強が分かるようになりたいという前向きな気持ちをもっている。
- 母親は、決めたことは実行し、予定の変更がある時には事前に連絡をくれる。
- 母子ともに心を開いた相手には信頼して話をしてくれる。
- 学級担任は家庭訪問を続けてきたが、状況の改善は見られなかった。ひらがなや数字の読み書きができない状況で、プリント学習を自力で行うのは困難であった。

3 ケース会議の状況

- 学級担任、管理職、教育委員会職員、SSWで、児童Aの学習環境を整えるための相談や協議を繰り返し、多様な学びの機会を保障することを目指した。

4 プランニング

【学校】

- 学級担任は、家庭訪問時において、児童Aの学習の取組を認める言葉掛けを行うとともに、児童Aが興味関心のある事について話す等、コミュニケーションを図る。
- 児童Aに登校に向けた前向きな様子が見られた段階で、放課後及び別室登校を促す等、スモールステップの支援を行う。

【NPO】

- 学校には行けないが、勉強が分かるようになりたいという気持ちを有していることから、学校外で学習できる環境を整えるため、市が委託しているNPO法人へ、定期的及び継続的に利用できるようにする。
- 担当する学習支援員は、教員経験者ではなく、児童Aが安心して接することができるように子育て経験のある女性とする。
- 児童Aが、学習支援に通いやすいように、本人の好きなブロック遊びから始め、プリント学習は数字あそび等、簡単なものから取り組み、できたという経験を重ねる。

【SSW】

- 家庭訪問時に、児童Aが取り組んだプリントを学級担任が確認したり、NPOから支援報告を学校に提出したりすることで登校扱いとなるよう、SSWが中心となり教育委員会と協議を進める。
- 母親の情緒安定及び母子の過度な密着が解消されるよう、SSWがいつでも相談にのれる体制をとる。

【若者就労支援機関】

- 母親の就労支援については、若者就労支援機関がサポートする。

5 社会資源の活用状況

- NPO法人による生活困窮世帯への学習支援を活用し、児童Aを支援行っている。
- NPO法人による就労支援機関を活用し、児童Aの母親を支援行っている。
- 教育委員会に所属する発達支援コーディネーターによる教育相談を行い、児童Aの及び母親の支援を行っている。

6 当該児童の変容（成果と課題）

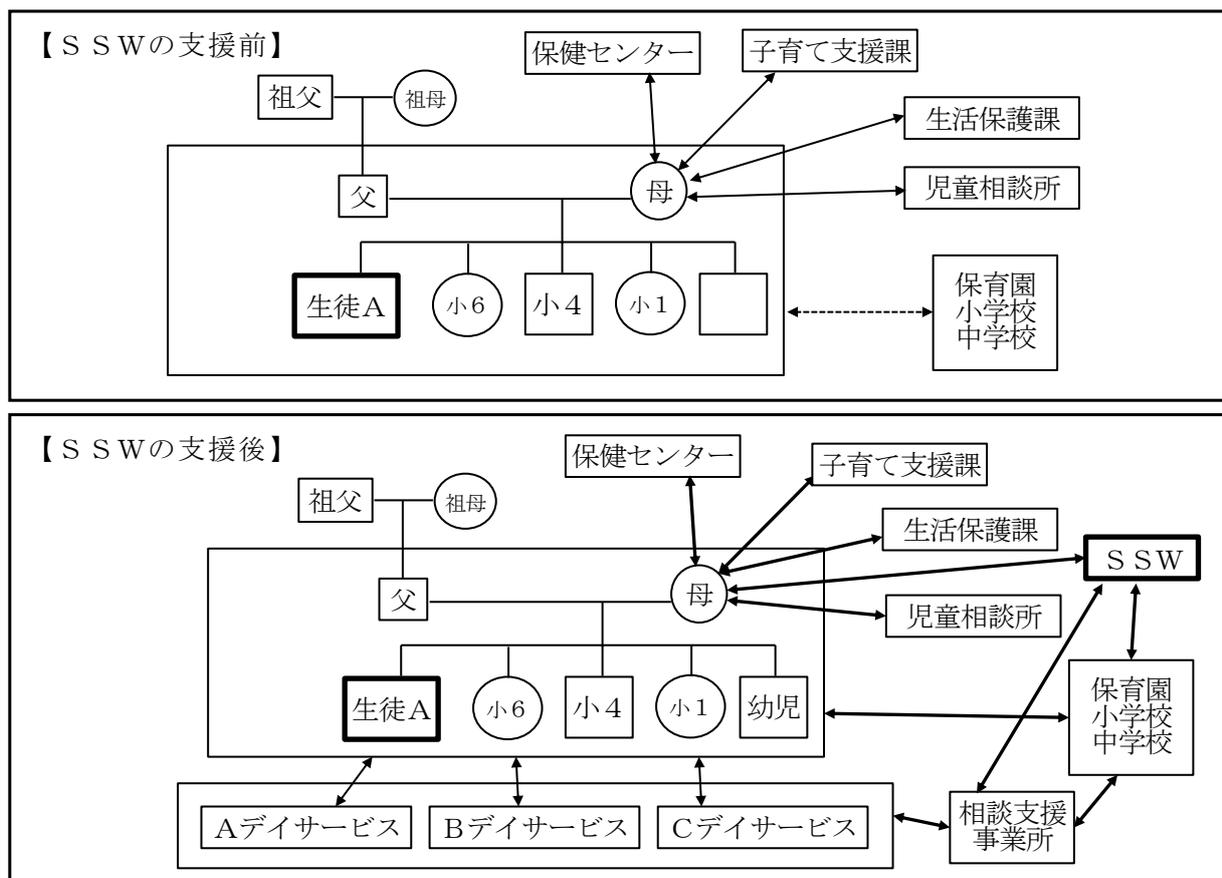
<成果>

- 児童Aに合った学校以外の学習環境を整えることにより、本人の帰属感や自己肯定感が高まり、学習意欲の向上につなげることができた。
- SSWが中心となって、教育委員会及びNPO法人と連携を図ることにより、児童A及び母親との信頼関係を構築し、安定した支援につなげることができた。

<課題>

- 児童Aの発達に係る検査を実施していないことから、検査を実施し、今後の支援の方向性を再検討する必要がある。
- 強い母子密着の傾向があることから、児童Aの学習支援に加え、母親の就労支援を継続して行う必要がある。

家庭における生活困難及び発達上の課題を抱える児童生徒に対する支援



1 気になる状況

- 生徒Aの家庭は、5人兄弟のうち、4人が小・中学校に在籍し、登校渋りや学習内容の理解について困難が見られるなど、特別な支援が必要な状況であった。
- 生徒Aの母親は、学校の対応に不満を抱いており、学校との関係は良好ではない。
- 生徒Aが幼い頃に、ネグレクトの疑いで児童相談所が関わり、その後、子育て支援課が継続して対応している。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 生徒Aの家庭は、父親、母親、5人の子どもの7大家族で、生活保護を受けている。
- 生徒Aに発達の遅れが見られる。
- 生徒Aの母親は、子育てを精一杯行いたいという気持ちは強いが、5人の子育てに苦勞しており、乱暴な声掛けをしたり、子どもの行動を制限したりしている状況である。
- 母親は、生徒Aに依存的になっており、母親の気持ち次第で欠席を促してしまうことがある。
- 父親は、季節就労中であり、家を離れることが多い。
- 父親は、育児に対し非協力的であるが、両親の仲は良好である。
- 両親の養育能力や地域住民との人間関係、生徒Aの発達の遅れなどに対し、支援が必要なケースである。

(2) 学校との情報共有の状況

- 生徒Aの母親が、子育ての不安や困難さについてSSWに相談した。
- SSWが中心となり、各学校で生徒Aの発達の遅れや必要な支援についての情報を共有するとともに、家庭の養育に対する支援策について関係機関と連携しながら協議を進めている。
- 生徒Aは、集団生活や対人関係において良好な経過が見られることから、特に、学習面の支援について各学校で連携して対応している。

3 ケース会議の状況

- ケース会議では、児童相談所や子育て支援課など、関係機関による連携を図るため、状況に応じてメンバーを招集した。
- 子育て支援課が主体のケース会議
 - ・出席者：子育て支援課、管理職、学級担任、特別支援教育コーディネーター、保育園職員、保健センター職員、相談支援事業所職員、SSW
 - ・内容：ネグレクトが疑われる状況が発生した際の対応について
- SSWが主体のケース会議
 - ・出席者：管理職、学級担任、特別支援教育コーディネーター、放課後等デイサービス担当者
 - ・内容：家庭の状況及び生徒Aの発達の遅れに応じた支援内容についての情報共有

4 プランニング

- 学校と家庭の関係構築に対する支援
母親の子育てや学校の指導内容について情報共有する場を設定する。
- 生徒Aの発達の遅れに対する支援
特別な教育的支援や、放課後等デイサービス等による支援を行う。
- 母親の養育に対する不安の解消に向けた支援
子育て支援課や放課後等デイサービス担当者と連携した相談体制を構築する。
- 関係機関の連携支援
複数の関係機関が関わることから、情報共有や対応策についてSSWが調整する。

5 社会資源の活用状況

- 医療機関における受診結果を基に、就学相談及び放課後等デイサービス利用に向けた相談を行う。
- 放課後等デイサービスや相談支援事業所、学校との生徒Aの発達の遅れに対する支援方針を共有する。
- 母親の困り感に応じて、児童相談所や子育て支援課、SSWが対応し、相談内容と対応方法を共有する。

6 当該生徒の変容（成果と課題）

<成果>

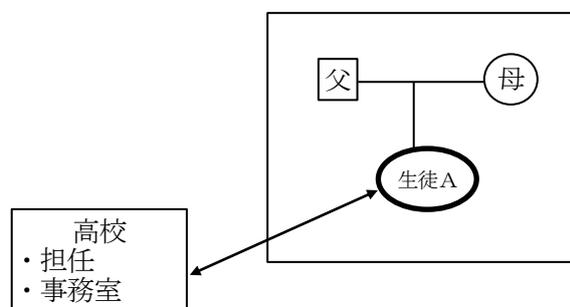
- 学校と家庭が、生徒Aの様子について情報を共有し、小・中学校において一貫した指導を進めたことにより、生徒Aが継続して登校するようになるなど、改善が図られた。
- 母親は、放課後等デイサービスなど、関係機関から生徒Aの養育に関わる支援を受けたことにより、養育に対する不安が軽減され、生徒Aへの声掛けが穏やかになった。

<課題>

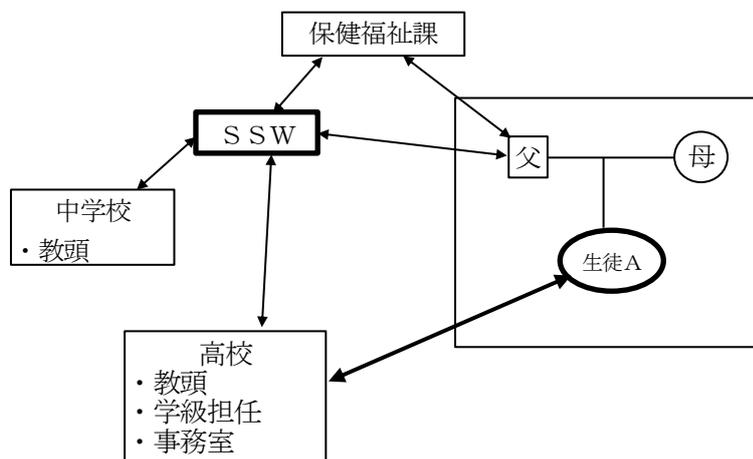
- 生徒Aの状況を的確に把握し、課題に応じた支援ができるよう、各関係機関で情報を共有するなど連携しながら対応する必要がある。

学校生活上の問題はないが困窮が疑われる家庭へ支援したケース

【 S S W の支援前 】



【 S S W の支援後 】



1 気になる状況

- 生徒Aは、学校生活におけるトラブルはないが、事務から授業料や諸費用が未納であること、制服も未購入であるため学校に保管してあった制服を貸与している状況であることについて、学級担任に連絡があった。
- 学校の事務から、父親、母親に電話で連絡しても話をする事ができず、文書を送付しても返信がない。
- 学校の事務から、保証人に文書を送付しても、返信がない。
- 生徒Aは、学校生活や家庭生活に困り感を感じていないが、学校から見ると、今後の高校生活に支障をきたす可能性が高いことが考えられた。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 生徒Aの家族構成は、父親、母親、生徒Aの3人で居住している。
- 生徒Aは、中学校に在学中、欠席は少なく、生活上問題となる行動などはなかった。
- 父親は、以前勤務していた会社が倒産し、就職活動を行っているが、就職できていない。

【 高等学校④ 】

- 父親は、就職活動していく中で、うつ病を発症し通院している。学校からの連絡に対し、幾度も学校へ行こうと試みたが、行くことができなかった。
- 父親は、福祉サービスの検討のため、幾度も役場に行こうと試みたが、行くことができなかった。
- 母親が、毎日パートで勤務し、家計を支えている。
- 弟は、小学校第5学年で、学校生活上、特に問題はない。

(2) 学校との情報共有の状況

- S S Wは、教頭との面談や電話を通して情報の共有化を図っている。

3 ケース会議の状況

- 第1回
 - ・目的：生徒Aのアセスメントのための情報収集の方針の検討
 - ・参加者：教頭、学級担任、S S W
 - ・内容：家庭の状況を把握し支援するために、家庭の状況のアセスメントのための情報収集の方法の確認、生徒Aの活用できる奨学金などの検討、指導助言の内容の確認
- 第2回
 - ・目的：生徒Aについての情報共有、生徒Aへの支援の方針の検討
 - ・参加者：教頭、学級担任、S S W
 - ・内容：家族の状況に係る情報の共有、各関係機関の支援方法の確認

4 プランニング

- 高等学校
 - ・学級担任は、生徒Aと面談し、父親や母親の状況、家庭での生活状況を聞き取り、生活状況を把握する。
 - ・学級担任は、生活の困窮状況の回復や、進路目標の実現に向け、就学給付金、奨学金制度について情報提供し、利用を促す。
 - ・学級担任は、当該児童の学校生活の様子を保護者に丁寧に伝えとともに、奨学金制度の利用について保護者に検討を促す。
 - ・教頭は、生徒Aが在籍していた中学校に働き掛け、把握している情報提供を依頼するとともに、生徒Aの父親、母親との連絡を依頼する。
- S S W
 - ・父親、母親と会い、利用できる福祉サービスについて情報提供し、関係機関との調整を図る。
 - ・学校と情報の共有化を図り、具体的な支援方法を検討する。
 - ・ケース会議を実施し、各関係機関の役割と支援の在り方を確認する。

5 社会資源の活用状況

- 生徒Aが在籍していた中学校は高校との連携を図り、生徒Aの支援を検討する。
- 保健福祉課は、S S Wと情報の共有化を図り、保護者への支援を検討する。
- S S Wは、学校との連携を密にするケース会議を実施し、支援策を検討する。

6 当該生徒の変容（成果と課題）

<成果>

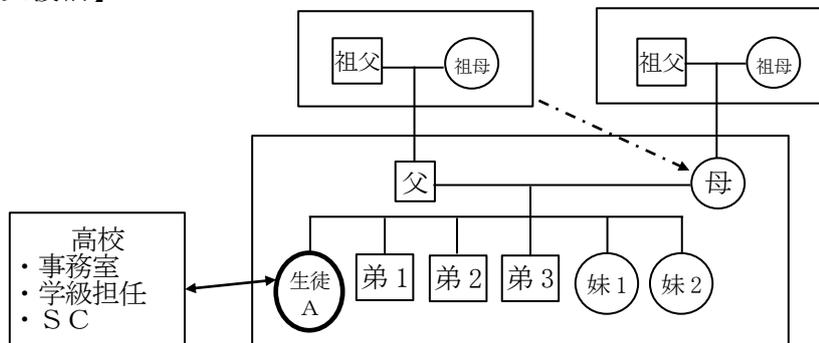
- 学校が、保護者に全く連絡を取ることができなかったが、連絡が取れ、家庭の状況を把握し、家庭と保健福祉課をつなげることができた。
- 生徒Aは、奨学金の給付を3年間受けることができるようになり、経済的な不安が若干解消された。

<課題>

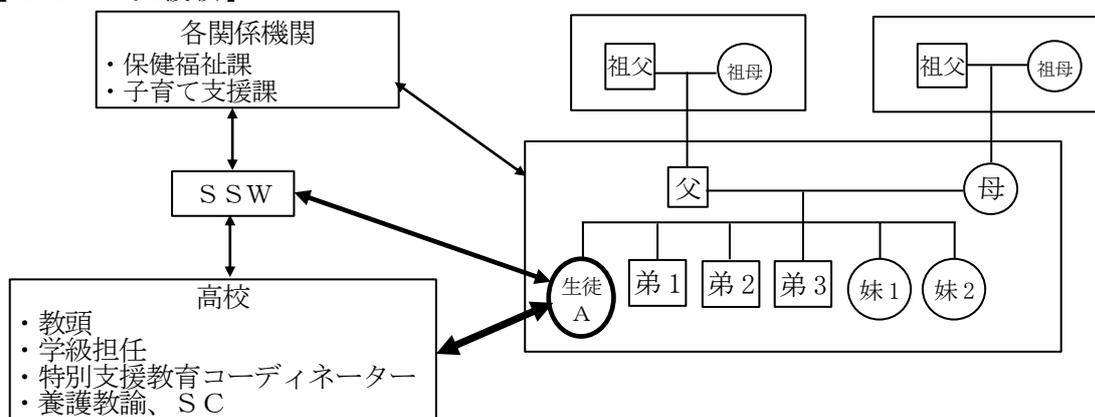
- 給付を受けた奨学金の適正な活用のために支援する必要がある。
- 今後も、生徒Aの家庭の困りごとに対応できる関係機関と調整する必要がある。

多子世帯の生徒へ支援したケース

【SSWの支援前】



【SSWの支援後】



1 気になる状況

- 生徒Aは、問題行動を起こすことはないが、精神的に不安な面が見られ、入学当初からスクールカウンセラーとの面談を定期的実施していた。
- 生徒Aは、1日欠席すると継続する時期があり、欠席が多くなったため、進級が不安視されたこともあった。
- 生徒Aは、学校行事などの参加について、学級担任に不安を訴えることがあった。
- 生徒Aは、学習習慣が身に付いておらず、教科書や資料集なしに授業を受けることがあり、注意すると家庭内で破棄された旨を教科担任に話していた。
- 母親が妊娠したことにより、生徒Aは、家事全般を行うことが増え、そのことで欠席することもある。
- 保護者は、学校の諸費用を滞納している状況があり、学校から滞納の件で連絡を取ろうとしても、連絡を拒否していた。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 生徒Aは、父親、母親、小学校低学年の弟2人、未就園の弟妹3人の合計8人で居住している。
- 生徒Aは、両親とよい関係を保てていないと感じており、そのことで自己肯定感が低い。
- 生徒Aは、家族の役に立つことを当たり前と考えており、アルバイトをし、自分に

【 高等学校⑤ 】

必要なお金を稼いでいる。自分の稼いだお金を妹弟にお小遣いとしてあげることや、母親に貸したりもしているが、そのことを疑問に感じてはいない。

- 保護者は、現在の生活状況に困り感をもっていない。
- 未就学児の弟妹たちは、家庭の経済的な状況から家庭での保育となっている。
- 母親は、片付けが苦手であり、家の掃除の際、生徒Aの教科書などを破棄したことがある。
- 母親は、子どもを関係機関に連れて行かれる不安のため、保健福祉課などの関係機関との接触を一切拒否している。

(2) 学校との情報共有の状況

- 母親の妊娠により、生徒Aが家事を行うことが増えて欠席するようになったことから、情報共有し今後の対応について検討することとなった。

3 ケース会議の状況

- 第1回
 - ・目的：生徒Aについての情報共有、生徒Aへの支援の方針の検討
 - ・参加者：子育て支援課担当、保健センター担当、小学校関係者、教頭、担任、養護教諭、保健環境部長、SC、SSW
 - ・内容：家族の状況に係る情報の共有、各関係機関の支援方法の確認、生徒Aの学校の指導助言内容の確認
- 第2回
 - ・目的：生徒Aについての情報共有、生徒Aへの支援の方針の検討
 - ・参加者：子育て支援課担当、教頭、担任、養護教諭、保健環境部長、SC、SSW
 - ・内容：家族の状況に係る情報の共有、各関係機関の支援方法の確認、保護者の養育に対する助言内容の確認

4 プランニング

- 高等学校
 - ・担任は、生徒Aと継続的に面談し、学習や家庭での不安に感じている生活状況を聞き取り、本人の現状についての考えを把握する。
 - ・学校は、生徒Aが家庭での家事を行う以外に生徒Aの自己肯定感を高められるような取組を行う。
 - ・本人の自立に向けた情報提供や進路指導を行うとともに、体験活動への参加を促す。
 - ・校内ケース会議（教頭、担任、特別支援教育コーディネーター、保健環境部長、養護教諭）で情報を共有するとともに、支援計画を作成し支援を行う。
- SSW
 - ・保護者が現状に困り感を感じていないことから、生徒Aの自立の支援を目指し、学校と連携しながら生徒の守りを中心として行い、生徒に変化があった場合、子育て支援課と連携して対応する。
 - ・学校と情報の共有を継続する。
 - ・ケース会議を実施し、各関係機関の役割と支援の在り方を確認する。

5 社会資源の活用状況

- SSWは、学校との連携を密にするケース会議を実施し、支援策を検討する。

6 当該生徒の変容（成果と課題）

<成果>

- 生徒Aは、欠席が減り、落ち着いた学校生活を送っている。
- 生徒Aの変化があった場合に対応できる体制をつくることができた。

<課題>

- 保護者の子育ての状況に伴い新たな課題が予想されることから、保護者へのアプローチの方法について検討する必要がある。